

境界を突破するふるまい
 一戸建て住宅のリノベーションによる非ヘスティア的住み方の提案一

21619009 小原 佳奈
 指導教員 宮 晶子 准教授

ハコ型住宅 つながり ヘルメス・ヘスティア ふるまい 郊外住宅地 リノベーション

1 研究背景と目的

戦後から現在に至るまで、暮らし・生活リズム・人や家族のつながり方は変わり続けてきた。しかし、それに対して戸建て住宅における間取りの変化はなく、外部に対して保守的な内に閉じた「ヘスティア的住み方」も変わることはなかった。この変わることをない住宅形態並びに住み方は、同心円のつながりを住宅内で完結させ、そこに住む人の逃げ場をなくし、引きこもりを生んだ。

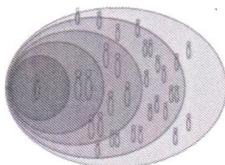


図1 同心円のつながり

また、核家族を前提とした住宅形態は時間経過により子どもが住宅をでる、という家族形態の変化が起こると余剰空間が発生する。さらに、加齢による運動機能の低下が起こると2階の居住空間は利用しづらいものとなる。こうした住宅と家族形態の変化によるミスマッチは住宅に関する様々な問題を引き起こす一因となった。

本研究では今ある住宅地において既存住宅の間取りを調べることにより、配置計画の傾向をまとめ、各特長別に分類したのちに個々に対してのリノベーションのプロトタイプを提案することを目指す。また、住宅の一部をリノベーションすることで「戸建て住宅とは血縁の核家族が居住し、他者は基本的に入っていない」という前提条件を崩す。これにより閉じた住宅に流動的な人が積極的に行き交うようになり、住宅内で完結してしまう同心円のつながりを広げると同時に、「非ヘスティア的住み方」が行われるような住宅を目標とする。

2 ヘスティアとヘルメス

場所についての現象学を展開するエドワード・ケイシーは人間の住み方には根本的に二つの様態があると提唱した。それがヘスティア的住み方とヘルメス的住み方だ。

ヘルメスとヘスティアはともにギリシャ神話に登場する神である。ヘルメスは「神々の伝令使であり、開かれた公共の場を移動する」。その住み方は「定住をせずに放浪し続ける住み方であり、常に建物の周囲を回る、ホームレスのような住み方」¹⁾である。反対にヘスティアとはかまどの女神であり、「家と家族的生活の中心である炉端を象徴する」。その住み方とは「そこに留まり続ける住み

方であり、中心に家を持つ。この住み方に適した建築物は求心的であり、円的であり、自己閉鎖的である」¹⁾とされる。

後者は現在ある多くの住宅に当てはまる。

この住み方は人のつながりを限定し、もし家族間で担いきれ

ない問題や突発的なアクシデントが起こったとしても外部に SOS を出すことができなくなってしまうという問題がある。また、こうした住宅は夜になると1階にある大きな開口部をすべてシャッターや雨戸により締め切る。そのため道路がととても暗くなり、防犯上危険な状態になってしまっている。

3 ひきこもり

現象学者の河野哲也氏は著書で「家の境界 (= 外壁) とは、自身の安全を確保するという目的の他に、不完全な自分を外からの視線から逃すという目的を持っている」¹⁾と記した。しかし、住宅内で完結した閉鎖的なつながりの中、自分を家族からの視線から逃そうとしたとき、逃げ場は「自室」という円のさらに内側に籠るしかなくなってしまう。

ひきこもりには精神的・身体的理由により外に出られなくなってしまう人もいるが、家族からの視線から逃れるために自室という小さい円に入っていった「超ヘスティア的住み方」を選択した人だとも言える。

4 住宅内で起こる事件

山本理顕氏は著書²⁾で「住宅はあまりにも密室化されてしまった」と述べており、山梨知彦氏はヴェネチア・ビエンナーレの指名コンペ³⁾で「近年、日本の住宅の多くがドア一つで外部から切り離された形式へ移行し、住人は近隣に対して無関心となった」と述べている。

以上のことから共通して言えるのは、現在の住宅というのは外部から切り離された内部のみを設計しているということ、そこに外部との関係は考慮されていないということである。

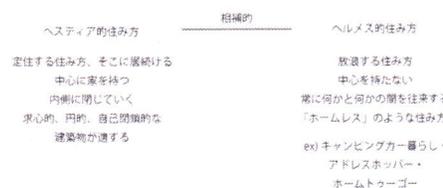


図2 二つの住み方

5 敷地概要

神奈川県川崎市中原区下新城3丁目2～5

最寄り駅の武蔵新城駅から徒歩8分程。徒歩5分圏内には市立小学校・県立高校があり、駅から徒歩15分圏内には大小の幼稚園・保育所等が多くある。

戦後、田畑を埋め立て作られた住宅地。緩やかに高齢化が進んでいるが、小・中学校が徒歩圏内にあるため、人口は一定数を保っている。しかし、高齢化により維持できなくなった住宅・敷地の売却並びに新築への建て替え・販売が起こっている。既にあるコミュニティの中に突如として出現した住宅は、外部から入ってきた家族を住宅の中に押し込めることになっていると考えられる。

6 住宅形態の調査

戸建て住宅において、玄関の位置に関係なく水回りは北側に寄せられることが多く、次点で東側が多い。南側に大きな開口部を設ける傾向がある。細長い形状の敷地・住宅においては、部屋や客間が道路に面することが多く、水回りは道路に対して奥まった場所に位置することが多い。

7 道路から見えるふるまい

キッチンの窓からは、夜になると生活しているがゆえに発生する電気の光が漏れる。その光は窓越しに見える洗剤や調味料と共に通行者へ安心感を与える。(図3)

出窓に置かれた置物、換気扇の上に置かれた棚の上に並ぶおもちゃの数々、屋根のある駐車場の下に置かれた黒板に道路近くに並べられた植木鉢。ハコ型住宅に開いた開口、住宅と塀の間や屋根の下には所々にそこに住む人の暮らしを見る。(図4)



図3 道路から見える電気の光



図4 道路から見える生活

このような外部に飛び出した暮らしや趣味の一部といった要素は、内部空間を外部へ拡張するはたらきを持つと思われる。

8 非ヘスティア的住み方へ

近代化が進む以前は、庶民の住宅も軸組木構造の開放的な造りで隣人との距離も近く、書生や女中が家の中に住んだり冠婚葬祭など家で行う行事も多く、ヘルメスの人の出入りがあり、物理的・心理的に開かれた場だった。それに対し、現代の戸建て住宅はヘスティア的住み方がされる場で、他者が入ってこないことを前提としている。また、2×4などのプレハブ工法のメーカー住宅の

「ハコ型住宅」が主流となり、開口部については採光・通風、防犯・プライバシー等が重要視されるに留まり、そこに人のつながりが考慮されることはない。そのような現代の住宅の一部を外部と内部が混ざる場所にする事で、機能・空間の貸し出し・他者を招いての井戸端会議や食事会・他者が一時たたずむ場など、他者が敷地・住宅の中に入ってくる余地を作る。その余地には「外部」へと地域内での活動を求めている人や、血縁とは違う「つながり」をもとめる人といった現代の「ヘルメス」が流動していき、独居老人や老々介護をする夫婦、孤立する子育て中の人、不登校児といった住宅の中で完結していた同心円的なつながりの中で逃げ場を失った人の「つながり」を再編していく。つまり、余地を作ることにより住宅の中で完結していた人のつながりを崩すと同時に、分断されていた外部と内部や敷地と道路といった境界を人が積極的に越境していく「非ヘスティア的住み方」がされる場を作る。

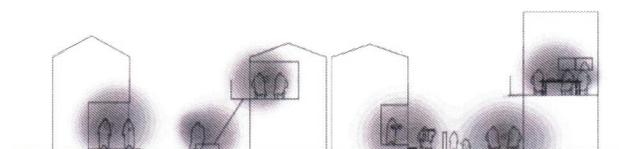


図5 コンセプトスケッチ

9 プロトタイプ提案

南面と北面に玄関のある住宅に挟まれた南北通り(図6)と、東面と西面に玄関のある住宅に挟まれた東西通り(図7)にある敷地・住宅のうち、住宅形態の調査から割り出した各状況に合わせてリノベーションのプロトタイプを提案する。

提案を考える際、水回りと階段位置は変えないものとし、住宅や庭の一部に最小限の変更を加えることで、住宅の非ヘスティア化を計ることとする。

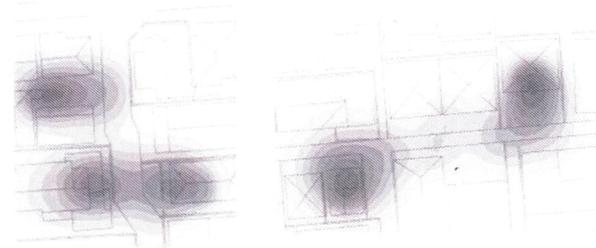


図7 東西通り

図6 南北通り

主要参考文献・引用文献

- 1) 「境界の現象学 始原の海から流体の存在論へ」河野哲也著 筑摩選書 2014年
- 2) 「脱住宅 『小さな経済圏』 山本理顕、仲俊治著 平凡社 2018年
- 3) 「切り離された建築 現代の過密な社会における暮らしと建築の問題」山梨知彦 ヴェネチア・ビエンナーレ (2020) 日本館キュレーター選定指名コンペ https://www.jpfc.go.jp/project/culture/exhibit/international/venezia-biennale/arc/17/pdf/plan_04.pdf (2019/12/03)